

令和6（2024）年度 みよし市中学生平和学習広島派遣団 学習成果報告書



令和6（2024）年7月31日（水）・8月1日（木）

目次

—— 第1部 はじめに ——

市長あいさつ	P 1
みよし市非核平和都市宣言	P 2
事業概要	P 3

—— 第2部 事業報告 ——

結団式及び事前説明会	P 4 ~ 5
派遣団員名簿	P 6
写真による行動の記録	P 7 ~ 14
参加者研修報告	P 15 ~ 31

第1部 はじめに

市長あいさつ

みよし市は、平成22（2010）年の市制施行を機に、世界平和を願うすべての国の人々と手を携え、戦争の惨禍を二度と繰り返すことのない社会と人類の恒久平和の実現を目指すため、「みよし市平和都市宣言」を制定いたしました。そして、世界でのロシアによるウクライナへの軍事侵攻や核兵器使用の威嚇が行われている状況を憂い、令和4（2022）年9月に、市民の皆様へ核兵器のない世界についてより深く考えていただき、核兵器のない世界に一步でも近づくことができるよう、より強い決意で「みよし市非核平和都市宣言」を行いました。

戦後79年が経過し、戦争を知らない世代が増えている今、私たちが戦争や原爆の体験を次の世代へ語り継ぎ、平和の大切さをどのように伝えていくのか、考えていくかがこの平和を守り、後世へ紡いでいくためにとても重要なことであると考えます。

市内の中学生の皆様を広島に派遣する「みよし市中学生平和学習広島派遣事業」は、戦争の記憶を風化させないための平和に対する取組の一つとして、平成28（2016）年度から開始しました。少しでも多くの参加希望者に参加いただきたいとの思いで、令和5（2023）年度からは、参加人数を各中学校3名ずつの計12名から、各中学校4名ずつの計16名に増員し、実施いたしました。派遣事業は、生徒たちが被爆地である広島に立ち、原爆の被害に関する資料を自分の目で見て、被爆者自身の体験を直接聞くことで、平和の大切さや命の尊さ、家族の絆を考えてもらう大変貴重な機会となっています。

この報告書には、市内4中学校の代表として派遣された16名の生徒たちが、恒久平和の実現に向け、次代を担う世代として、これからの将来に向けて取り組んでいかなくてはならないと感じた「平和へのメッセージ」が綴られています。そして、派遣で生徒たちが感じた思いを、より多くの皆様と共有していただくために、この報告書を作成しました。報告書を読んでいただいた皆様の、いま一度平和について考えていただくきっかけになれば幸いです。

結びに、この派遣事業にご協力をいただいた学校関係者をはじめ、多くの皆様にお礼を申し上げ、ごあいさついたします。

令和6（2024）年12月

みよし市長 小山 祐

みよし市非核平和都市宣言

核兵器のない世界と恒久平和は、私たち人類共通の願いです。

わが国は核兵器による攻撃を受けた唯一の国家であり、私たちは、非核三原則を掲げ、核兵器廃絶を全世界に訴え続けていかなければなりません。核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、平和の尊さについて、考え、語り、戦争で犠牲になった方々の想いと共に後世へ引き継いでいくことは私たちの使命です。

戦争から年月が経過し、核兵器と戦争を現実として体験された方が年々減る中、核兵器と戦争の記憶を風化させ、惨禍を二度と繰り返すことがあってはなりません。

みよし市は、日本国憲法に基づいて、世界平和を願うすべての国の人々と手を携え、強い決意で、核兵器のない世界と恒久平和を実現するため「非核平和都市」を宣言します。

令和4（2022）年9月29日

愛知県みよし市

事業概要

1 事業名

令和6（2024）年度みよし市中学生平和学習広島派遣事業

2 目的

- (1) 核兵器のない世界と人類の恒久平和の実現を目指す「非核平和都市」であることを宣言した本市として、「平和に関する事業」に取り組む。
- (2) 中学生が、実際に広島を訪問し、原爆ドーム及び広島平和記念資料館の見学や被爆者による講話を通して、戦争の悲惨さ、平和の意義について考えてもらう機会を提供し、命の大切さや家族との絆等についての認識を高める。

3 内容

- ・原爆ドーム及び広島平和記念資料館の見学
- ・被爆者による被爆体験講話の受講

4 派遣期間

令和6（2024）年7月31日(水)から令和6（2024）年8月1日(木)まで〔1泊2日〕

5 派遣人員

- (1) 団長＝みよし市総務部長
- (2) 生徒＝市内中学生 16名（各中学校4名）
- (3) 引率＝学校教育課主幹 1名、こども相談課副主任 1名、
総務課主事 1名
計20名

第2部 事業報告

結団式及び事前説明会

《日にち》 令和6（2024）年7月13日（土）

《場 所》 市役所3階研修室

1 結団式

- (1) 認定書交付
- (2) あいさつ
- (3) 団長あいさつ及び団員紹介
 - ア 団長あいさつ
 - イ 自己紹介
- (4) 写真撮影

派遣団員に
認定します！



広島派遣に応募した理由、
派遣で学びたいことを自己
紹介とともに発表しました。



- 2 事前説明会
 - (1) 事業説明
 - ア 派遣事業全般について
 - イ 研修報告について
 - (2) 質疑応答



3 レクリエーション（自己紹介ゲーム、生まれ月日順整列ゲーム）



団員同士の親交を
深めました！

派遣団員名簿

○ 生徒合計16名

学校名	団員名	学年
三好中		1
		2
		3
		3
北 中		1
		1
		3
		3
南 中		2
		2
		3
		3
三好丘中		1
		3
		3
		3

○ 団長

区 分	氏 名
総務部長	城 千穂子

○ 引率者3名

区 分	氏 名
学校教育課主幹	多治見 哲也
こども相談課	長田 あつ美
総務課主事	松浦 あみ

○ 応募者数

学校名	合 計
三好中	6
北 中	4
南 中	5
三好丘中	9
合 計	24

応募者総数／派遣者数＝24／16（1.5倍）

写真による行動の記録

<出発式>

広島に向けて出発する前に、派遣中は自分が学びたいことを考えて行動し有意義な派遣にすること、派遣団としてみよし市の中学生の代表である自覚をもって行動することを確認しました。また、熱中症対策など、健康面に関する注意も行いました。



派遣団団長の
あいさつ

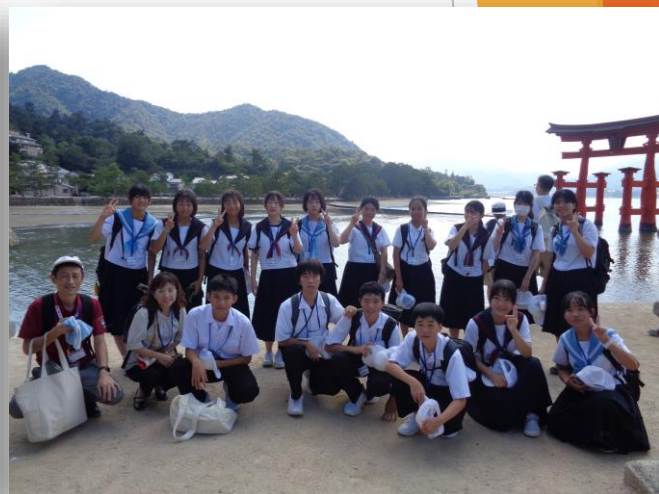
決意表明！



さあ、広島へ！

<宮島>

広島に到着後、派遣団員の親睦を深めるため、フェリーで宮島に渡り、厳島神社を参拝しました。案内の方の説明を聞き、文化遺産に触れることで、歴史・文化を大切にする気持ちを高めました。宮島のシンボルである大鳥居は改修を終え、壮大な装いを見せてくれました。その光景は、歴史・文化を守る大切さを感じさせてくれました。また、厳島神社の天神社には、学問の神様である菅原道真が祀られているため、冬に受験を控えた3年生を中心に、手を合わせました。



<学習・宿>

宿では、自分はどうして広島派遣に応募したのか、事前に調べてきたこと、平和記念資料館で特に学びたいことについて考えを共有し、2日目に備えました。

また、食事の号令の際などには、各自が感じたこと、広島派遣への思いなどを自分の言葉で団員みんなに伝えました。人により感じることは様々で、自分と違う考えに触れ、新たな視点で平和について考えることができました。



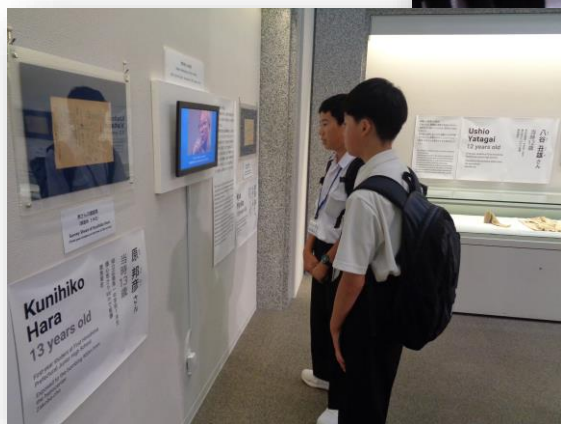
<原爆ドーム・平和記念公園>

ガイドボランティアの方に平和記念公園内の慰霊碑について解説をしてもらい、原爆が落とされた背景や当時の様子などの詳しい話を聞くことで理解を深めました。「原爆の子の像」の前で市内中学校の生徒が作成した千羽鶴を捧げ、「原爆ドーム」などの建造物を見学し、戦争の悲惨さ、原爆の被害の大きさ、その後の広島の復興について考えさせられました。



<広島平和記念資料館>

平和記念公園の散策後、広島平和記念資料館を見学しました。原爆の被害を受けた人々の写真や遺品などの展示物や当時の記録を目にすることで、原爆がもたらす被害の大きさや、原爆は、戦争後も人々を長年苦しめるものであると感じ、家族や友人と過ごすことができる現在の平和がいかに大切なものかを考えることができました。



<被爆体験講話>

広島平和記念資料館会議室で、被爆された瀧口秀隆さんから、当時の状況を示す資料とともにお話を伺いました。

被爆した時の状況は、4歳の時、爆心地から1.8km離れた自宅で、朝食後外にいたら飛行機の音がしたため急いで帰り、玄関の引き戸を閉めようとしたときに被爆したというものでした。瀧口さん自身やご家族に起きたこと、戦争と核兵器の怖さや広島被害の状況、終戦後も残る健康面等への不安など、様々なお話を聞き、平和の大切さをより深く考える機会となりました。



瀧口さん自身の
経験や広島で起きた
戦争の現実をお話し
いただきました。

被爆者の講話を
通して平和の大切さ
を改めて考えること
となりました。



<帰着式>

広島の光景を見て感じたこと、今後も平和を続けていくために自分たちにできることについて、代表生徒1名が報告しました。今回の派遣で知った戦争や原爆のこと、直接聞くことができた被爆者の方の思い、この派遣を通して自身で感じた平和の大切さを、派遣団員自らが家族や友人、周りの人々に伝えていくことを確認しました。

2日間の広島派遣で、今ある平和は当たり前のもではなく、多くの戦争の犠牲者があり、復興の努力の上に今の平和な生活があることを実感する機会になりました。



<平和を紡ぐつどい>

令和6（2024）年9月13日（土）に開催された「平和を紡ぐつどい」に派遣団として参加し、献花、派遣団全員での「みよし市非核平和都市宣言」の読み上げ、派遣団員2名の「中学生平和学習広島派遣報告」を行いました。

その後、お招きした戦争体験語り継ぎ手による講話を傾聴し、会場内の「平和を紡ぐパネル展」を見学しました。



派遣團員研修報告



1945年、8月6日、午前8時15分。今から79年前、広島に原子爆弾が投下されました。たくさんの尊き命や幸せがその一瞬の出来事で奪われました。私は、戦争を経験した事がないからこそ、この派遣を通して、原爆ドームや平和記念資料館、被爆された方から話を聞くなどして、私が生まれる前の日本ではどのような事が起こっていたのかということを知りたいと思いました。

まず、原爆ドームを見学しました。丸い屋根や壁はボロボロで、原爆の被害の大きさを肌で感じる事が出来ました。原爆ドームは何度も保存工事を行っており、平和を求めるシンボルとして大切に保存されていることが分かりました。他にも平和記念公園では、原爆の子の像を見学しました。像の周りにはたくさんの折り鶴が飾られていました。この像のモデルである佐々木貞子さんは、2歳で被爆して、12歳の時に白血病になり、長い闘病生活後に亡くなりました。千羽の鶴を折ると願いが叶うと聞いた貞子さんは、薬の紙でコツコツと鶴を折り続けました。私はこの話を聞いて、今の私と同じ歳で亡くなっていることが分かり痛々しい気持ちになりました。また、被爆した広島は、「75年間草木は生えない」と言われていたにも関わらず、自然豊かで、公園内はもちろん、街並みもとっても綺麗で、広島の方々が必死になって街を元に戻そうとしていたのだらうなと感じました。その後は、平和祈念資料館を見学したり、被爆された方から当時の様子などを聞いたりしました。資料館では、原爆が落ちた直後の写真や絵、被爆して亡くなった方の服や思い出の品などが飾られていました。私は特に、黒焦げになった弁当が印象に残っています。弁当の持ち主は当時13歳で被爆した折免滋さんの物で、この弁当と水筒を骨になった滋さんが抱えていたおかげで、滋さんの母が見つかることができたそうです。滋さんは戦争に行った父や兄の代わりに山で畑を作っていました。その日の弁当には、畑で初めて取れた野菜で作ったおかずが入っていて、お弁当を楽しみにして出かけましたが、食べる事が出来ずに亡くなりました。私はその話を知って、何もしていない無実の子供が、領土などの問題から始まった戦争に巻き込まれて亡くなっていた昔の日本が信じられない程、酷い国だったのではないかと思います。次に、実際に被爆された瀧口さんから話を聞きました。瀧口さんから聞いた当時の様子は資料館にあった絵や写真そのものでした。8月6日はとても天気が良く、雲一つないような青空だったそうです。B-29の音がして家の中に逃げ、引き戸を閉めようとした瞬間に被爆した瀧口さんは、一瞬で強烈な光や熱、爆風がきたとおっしゃっていました。話の最後に、世界中にある核兵器の数は1万2000～1万3000発程あるそうで、広島や長崎に落とされた原子爆弾よりも何十倍、何百倍もの威力があるそうです。

昨年行われたG7広島サミットではアメリカやフランス、イギリスなど、先進国である7か国の首脳が広島に集まり、原爆ドームや資料館の見学をされました。そこで、日本を含む7か国の首脳達は平和について深く考えて母国へと帰られたと思います。しかし、資料館にある地球平和監視時計の最後の核実験からの日数のところには、79日と書かれていました。平和記念公園をガイドしてくださった方はその数字を見て、核実験をしたアメリカは広島サミットに来て戦争の悲惨さや命の尊さを知っているはずなのになぜそのようなことをするのだらうとおっしゃっていました。その為、戦争をしてはいけないと誰もが分かっているはずなのに、世界のどこかではまだ核兵器を使用していたり、戦争をしていたりしている事が分かりました。今後の平和を守っていく事、広島で起こったことを広めていくのは私達の使命なので、自分ができる事を改めて考え、行動していきたいです。

被爆地ヒロシマを訪問して

三好中学校 2年

僕は広島派遣団に参加して原子爆弾の恐ろしさや戦争のひさんさをたくさん学びました。

1945年8月6日午前8時15分に一瞬にして、14万人が一発の爆弾によってなくなっていました。被爆した人々は、原子爆弾というものを知らず苦しみました。この話をきいてとても悲しく、怖かったです。資料館には、ボロボロになって、血がにじんだ服や、やけどを負った人々の写真、熱によって変形してしまった鉄製の弁当箱や三輪車がありました。当時の状況や、原子爆弾の威力が自分も痛みを感じるほど伝わりました。被爆された人に当時の状況を暗く悲しく小さな声で話していただきました。彼は、爆心地から数kmはなれたところで被爆したそうです。それにもかかわらず後ろにとばされてしまい気を失ってしまったそうです。うでは大やけどを負い、彼の母は背にまっ赤な大やけどを負ってしまったそうです。2人は痛い、痛いと言いながら、川を歩き島からひなんしたそうです。水をのみたい、のどがかわいたと思うなか、川の水はのめないので、防火用水の水をのんだそうです。本当に辛く、苦しく、まさに地獄のようだったと感じ、本当に自分もつらかったです。この派遣団の全体を通して思ったことが2つあります。1つ目は、核爆弾は使ってはいけないということです。資料館を見学した丁度79日前にアメリカで核爆弾の実験を行なったばかりでした。広島でたくさんの人をなくしてしまった核の実験をするなんて、とても悲しかったです。今、ロシアとウクライナの戦争でロシアが核をつかうとおどしているけど、昔より進化した核をつかえば、もっと多くの人がなくなってしまうだろうし、もしかしたら地球が丸くなくなるかもしれないです。なので、また広島の悲劇をくり返さないように核をつかわない、もたないを世界に広めなければと思いました。2つ目は、人間はすごいということです。一度焼け野原となった広島が今は、都会となり、政令指定都市となっています。一度0になって、たくさんの人がいなくなってしまったのに、めげずに広島を発展させ続け、とてもきれいな自然豊かな街を造り上げるなんて、やっぱり人間はすごく、努力をした方々に感謝を直接したいです。最後は、戦争はいけないということです。先ほどのようにロシアとウクライナが戦争しているけれど、話し合いで決めれば、だれも死なずに、平和がつづくはずなのに、武力を使って分からせようとしています。それぞれにも言い分があるのも分かるけど、その言い分を関係のない人に向けて、人を殺したりするのはちがうと思います。昔に、たくさんの人をなくし、大切な人、愛する人を目の前で亡くした人がいるのだから、このひげきを絶対におこさないためにも、やめるべきだと思いました。この派遣団に参加して伝えたいことがあります。それは、核・戦争をなくすことを訴えることです。広島には、「ノーモアヒロシマ」という言葉がありました。原爆による悲劇を二度とおこさないということです。これを日本から広めることが、平和への第一歩だと思います。地球で長く、変わりのない日常をすごすために、平和を世界に広めていくのは、どうでしょうか。

今、自分ができること

三好中学校 3年

長さ3メートル、直径70センチ。広島に投下された原子爆弾の大きさです。被害は広島市内の全域におよび、建物の90%以上が破壊、焼失し、約14万人の人々が亡くなりました。被害の大きさに比べ、原子爆弾はとて小さく改めて、その威力に驚き、戦争の恐ろしさを実感しました。

原子爆弾投下から79年経った今でも、「被爆の後遺症」を患う人がたくさんいます。被爆を体験した瀧口秀隆さんに話を聞きました。瀧口さんは4歳の時、爆心地から、1.8キロメートル離れた自宅で被爆されました。

真夏の暑い日、朝ご飯を食べて、日陰で遊んでいたとき、飛行機の音がしたので母親と母親が抱いていた妹と家に戻りました。玄関の引き戸を閉めようとしたときに、熱いと思う間もなく、あ。という間に爆風を受けましたこの時、腕にやけどを負いお腹へ皮膚を移植したそうです。防空壕で過ごしたり、食料が十分に無く、水に砂糖を溶かして妹に飲ませたりと、今の自分には想像すら難しい出来事です。食料へ配給もあったそうですが、量が少なく自分で道端に咲いていたドクダミなどをとって食べていたそうです。

また、母親は、やけどをしてからずっとうつぶせだったため、背中にうじ虫が湧き、41度の発熱が続きましたが、なんとか耐え、立ち上がる練習を始めたそうです。ずっと寝たきりだったから、うまくお腹に力が入らず赤ちゃんのようだったと話していました。

日本は77年間戦争に明け暮れていました。それから79年、核兵器や爆弾は一度も落とされることなく、平和に暮らすことができます。これは、日本が戦争をしないという憲法のおかげだとおっしゃっていました。私は、改めて、平和を祈る憲法の大切さを実感しました。瀧口さんの、「平和は油断したらいつの間にかなくなる」「大きい花、小さい花、きれいな花、きたない花、色々あるけど良いところを見つけ、違うところを認め合い協力し、大きな花束に」との言葉がとても印象的でした。

私は、広島と長崎で起こったことをあまり知らなかったけれど、詳しく学んで知ることができ、身近な人に伝えられることができて良かったなと思います。2度と戦争を起こさないようにこの悲惨な事実と、学んで抱いた平和への思いをたくさんの人に伝えていきたいです。

広島派遣団に参加して

三好中学校 3年

私がこの派遣に参加した理由は、学校では学べないことを自分の目で見て、肌で感じたいと思ったからです。

実際に原爆ドームを見て、秒速280メートルという爆風の威力を感じることができました。あの大きな建物が一瞬にして破壊されてしまう、とんでもない物が広島に落ちてきたのだと思いました。そして、そこには、建物だけでなく、人々の日常があったのです。

平和記念資料館では、火傷を負った人の写真がたくさん展示されていて、人間ってこんなふうになるんだ、なれるんだと目を背けたくなるほど衝撃的なものばかりでした。写真に写った人の目は、何かを訴えているような、そんな目をしていて、心が締め付けられるような感覚でした。資料館にある時計には、原爆が落とされてから28850日、最後に核実験から79日と表示されていました。私は、広島、長崎に原爆が落とされて以来、核兵器は、使われていないと思っていましたが、そうではありませんでした。今もなお使われ続けています。アメリカは、79日前にも核実験を行ったそうです。館長さんは、「核兵器の使用は人類の終わり」と言っていました。広島、長崎だけでなく、被爆国として、日本全体が核兵器の使用禁止を訴えていくことが大切だと思います。最後に被爆者の方からお話を聞きました。スクリーンに映し出された絵と同時に体験した事を説明して下さいました。絵がとてもリアルで、いろんな声、いろんな音が聞こえてくるようでした。怪我の痛みや戦争によって亡くなった人への悲しみや悔しさは、本当に計り知れません。

今回の広島派遣では、本当に貴重な経験ができました。戦後79年経つ広島の街はきれいに整備され、とても活気がありました。ただ「戦争」というものが単に歴史上の出来事ではなく、今もなお続く日本の問題なのだと思います。当時の子供も今の子供と同じように遊んで、家族と笑い合っていたはずなのに、一瞬にしてその日常が奪われました。

果たして戦争で得たものは何かあったのでしょうか。私は、「ない」と考えます。今の日本があるのは戦争があったからなのかもしれませんが、戦争は多くの人々の命や心をも奪いました。戦争の怖さ、原爆の怖さは、今は被爆者の方が語って下さっています。しかし、これから先10年、20年同じ状況とは限りません。平和な毎日を守っていくためにも、被爆者の方から直接話を聞いた一人として、私も出来る限りの方法で伝えていきたいです。

日本だけでなく、世界中で平和な毎日が続くことを願います。

平和のためにできることは、何だと思いますか。昭和20年8月6日に広島、9日に長崎に原子爆弾が投下され、多くの方々の尊い命が奪われました。私はそのことを小学校のころに知り、胸が押しつぶされそうな気持ちになり、核兵器の恐ろしさを知りました。

中学生になり、平和への意識が一層高まりました。核兵器のない世界にしたい。そう思うだけでは変わらないと思い、私は広島派遣に参加しました。広島県に訪問し、原爆ドームや平和記念資料館であのときの悲惨さや、平和に対して思いをはせました。原爆ドームではレンガが破壊されていたり、焼けていたりと本当に原爆の影響でこんな悲惨な状態になるんだな、と思いました。平和記念資料館ではとても心にささる絵が展示されていました。その絵は、人々が水を求めて彷徨う様子や、川に流される人々が描かれていました。人間が原爆でこんな姿になるんだと苦しい気持ちになりました。他にも被爆したまくらや服が展示されていました。使っていた人の思い出がたくさん詰まっているのに、それを原子爆弾はうばってしまうのだと苦しい気持ちになりました。更に私たちは、被爆者の方に直接お話を聞くことができました。青空が広がった日に日陰で遊んでいると原爆が投下されたこと、爆風で気を失われたことなど、原爆による被害や、命を奪う戦争は絶対にしてはいけないことを教えて下さりました。実際に話を聞くことで、どれほど戦争はしてはいけないのかが改めて分かり、苦しい気持ちになりました。ですが、私が驚いたことは、七十五年は草木も生えぬと言われていた広島に、とても美しい緑が広がっていたことです。きれいな緑をとりもどすという当時の人々の復興にもとても感動しました。さて、原爆ドームや平和記念資料館を見学したうえで、私は苦しい思いになるときが何度かありました。でも、苦しい気持ちになったからこそ、もうこのできごとをくり返さないために、核兵器が存在しない世界、戦争が存在しない平和な世界にしなければいけない。それが、唯一の被爆国である日本国民の使命なんだと痛感しました。他人ごととして捉えてはいけません。一人一人が動けば、その力は何倍にもなり、平和な世界を築くことができます。核兵器のない世界、平和な世界にすることは人類共通の願いです。その世界を実現するためには、自分にできることを探し、それを実現することが大切だと、今回の研修で分かりました。例えば、図書館やインターネットで当時のできごとについて調べてみたり、ニュースで戦争の特集をしていたら見てみるなど今すぐできることはたくさんあります。平和な世界にするためには、まずは当時のことを調べるのが大切だと思いました。原爆死没者慰霊碑には、「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」と刻まれています。戦争と、広島、長崎のできごとを忘れずに、平和な世界を築いていきたいです。

今回僕が広島派遣へ応募した理由は、とにかく戦争を知りたいという強い思いからでした。僕の周りには戦争を経験した人はいません。両親はもちろん、祖父母も戦後生まれです。だから僕の知る戦争は本や写真で見たものです。ヒロシマの原爆投下も写真で見ました。一瞬で多くの人が亡くなり、多くの人が苦しんだことがわかり、原爆、戦争の恐ろしさを知りました。自分の国で起きたこんなにも、悲惨な歴史を風化させてはいけません。同時にそんな思いもわき上がりました。亡くなった多くの人、一人一人の人生を、体験を僕達が引き継いでいかなければいけません。

今回被爆された方から実際に話を聞き、本や写真には書かれていない、一人一人の体験を知ることができました。

瀧口さんが被爆されたのは4歳の時 爆心地から1.8km離れた自宅でした。お母さんは背中に大やけどを負い、妹は食べる物もミルクもなく、栄養失調で亡くなりました。今の平和な日本に住んでいる僕には何もかもが信じられない話でした。いつ敵から爆撃を受けるかもしれないという日常も、食べる物が無いという日常も、いつ自分が死ぬかもしれないという日常も、今の僕には、決して味わうことのない生活です。そんな経験をされた瀧口さんの目には、今の平和な日本はどのように映っているんだろう。ふと、そんなことを思いました。

私達が原爆ドームを訪れた日は、朝から抜けるようなきれいな青空が広がっていました。原爆が投下された8月6日も快晴でこんなきれいな空だったんだろうと思うと、複雑な気持ちになりました。誰もがこの後に起こる惨劇を考えもしなかったはずです。すべての人の日常が一瞬にして奪われた、原爆ドームに展示されている遺品がそれを物語っていました。

世界にはいまだに数万個の原子爆弾が存在します。どれだけ原爆の悲惨さ、平和を訴えようと、地球上に原爆が無くならない限り本当の平和は訪れないと思います。どの国の人々も平和を望む気持ちは同じなはず。自国を守るために原爆を保有するのは間違っています。

世界唯一の被爆国である日本は原爆を保有するのではなく、持たない選択をしました。非核三原則を掲げ、自ら核兵器を持たないことで平和を訴えています。これはとても勇気ある選択であるとともに、最も強く世界へ訴えられる方法でもあります。核のない平和な世界。被爆された方みなさんの思いは一つです。今回の広島派遣を通して僕が感じたこと、思ったことを平和のリレーとしてバトンをつなぎたいと思います。

私は2024年7月31日から8月1日にかけてみよし市内の中学生16名と広島派遣団に参加した。その日はとても晴天で気温35度を超える猛暑日だった。1945年8月6日もこの日と同じように青い空が広がる晴天で真夏の太陽が昇っていたらしい。

私がこの広島派遣団に参加した目的は2つある。

1つ目は、原爆が落とされた当時の広島の実況や1発の原子爆弾によりどれほどの被害影響を及ぼしたのか、この1つの出来事に隠されたたくさんの真実を知りたいと思ったからだ。

2つ目は、普段交流のないみよし市内の同じ中学生と派遣を通して交流し共に考え、話し合う機会を持つことである。

研修2日目、広島市の平和記念資料館を訪れ私は原爆の恐ろしさを目の当たりにした。広島に投下された原爆は、地上600メートルの上空で炸裂した。その瞬間に強烈な熱線と放射線が放出され、強烈な爆風が吹き抜けた。広島市内のほぼ全域が被害を受け、多くの人たちがひどい火傷や傷を負って亡くなった。また、放射線は建物を突き抜けて人体の奥深くまで入り、深刻な影響を及ぼした。

私たちは実際に被曝に遭われた瀧口秀隆さんの体験講話を受講した。当時五歳だった瀧口さんは8月6日の午前8時ごろ外で遊んでいたら飛行機のプロペラの音が聞こえ、家の中に入ろうとした時に被曝した。ピカッと光り、左腕から指先まで火傷を負ったそう。すぐさま強烈な爆風が吹いて小さな体は吹き飛ばされ、頭をぶつけて気を失った。瀧口さん本人やお母さんはひどい火傷を負ったものの一命を取り留めた。

だが妹の弘子さんは、その後十分な栄養が確保できないままお母さんからの母乳をもらえない状況でわずか10ヶ月で尊い命を失ってしまった。

お母さんは卑劣な環境の中、背部にウジ虫がわき這いずりまわりそれをおばあちゃんが泣きながら割り箸でつまむという想像もつかない現実があったそうだ。

私は、これまで授業で学習した知識しかなかったがこの話を聞いて、当時の広島は自分が思っていた何十倍、何百倍も悲惨で悪烈な状況があったと知った。資料だけではわからなかったが、実際に瀧口さんからの生々しい経験談を聞いてその日だけではなく、そこからの卑劣な環境が長く続き苦しい生活があったことを改めて知った。私は言葉では言い表せない気持ちとなり胸が締め付けられた。

今回の学びから共に研修に参加したメンバーと平和の尊さについて深く考え、意見を出し合い、共感し絆を結ぶことができた。

私は、この広島派遣を通して原爆の悲惨さや命の尊さについて学んだ。79年たった今、このような体験談を聞けることは非常に貴重である。そのため私のこれからの役割は、2度と同じ過ちが起きてはならないということを同世代や後の世代に語り継ぎ、風化させないことだ。

世界では今も核実験が行われている。平和は当たり前ではない、それを1人でも多くの人に知ってほしい。1日でも早く世界中の人々に笑顔溢れる日常が訪れることを願う。

広島派遣を通して

北中学校 3年

私は、戦争についての本を読み、そこには学校では触れられていないことが多く書かれていました。小説に書かれていることはどこまで本当なのか、教科書で書かれていることだけでなく、実際にはどれほど悲惨だったのかを広島で感じたいと思い広島派遣に参加しました。また、日本からの目線ではなく、広島からの目線で平和について考えたいと思っていました。

私が広島派遣の中で一番印象的だったのは、平和記念資料館の地球平和監視時計です。地球平和監視時計というものは、広島への原爆投下からの日数と最後の核実験からの日数が書かれていました。最後の核実験からの日数は七十九日でした。私は驚くよりも悲しくなりました。詳しく話を聞いてみると、最後に核実験をしたのはアメリカだそうです。アメリカはG7として平和記念公園に訪れていました。館長の方はとても悔しそうな顔をしていました。私は平和というものがどれだけすばらしいもので当たり前ではないものだととても考えることができました。

私は現在の広島街にも驚かされました。平和記念資料館には原爆投下前の広島街の様子と、原爆投下直後の広島街の様子がありました。原爆投下前の広島街は活気があり明るい街並みが見られました。しかし、原爆投下後の広島街はとても暗く本当に同じ町かな、と疑ってしまうほどでした。そして、私が訪れた現在の広島街は、原爆投下前の広島街よりも活気にあふれ、とてもすてきな町でした。このような様子を見て、人ってすごいな、素晴らしいなと大きく感じました。核兵器はそのような人を破滅させます。体の傷だけではなく心に治ることのない大きな傷をつけてしまいます。絶対に使ってはいけません。

私はこれからこの広島派遣で学んだ平和のすばらしさ、核兵器や戦争の恐ろしさを事実と一緒に私の感じたことを周りの人に伝えていき、自分たちの手で責任をもって平和を続けていきます。

僕がこの広島派遣に参加した理由は、教科書に書いてあることしか知らない戦争について、この派遣を通して自分なりの戦争に対する理解を深めたかったからです。

平和記念公園、広島平和記念資料館を見て、戦争の恐ろしさや、原子爆弾の怖さを、改めて感じました。初めて見た原爆ドームは、建物が大きく感じるぐらい迫力がすごかったです。原子爆弾で、ほとんどの建物が壊れてしまったと思うと、原子爆弾の強さが分かり、そして原爆ドームが残っていることは、奇跡だなと感じました。その後の資料館では、「血を吐きながら亡くなった弟」という題名の絵がありました。当時二十歳だった弟は、建物疎開の作業中に被爆し、一時は歩けるまで元気になったが、意識があるまま血を吐いて亡くなったと書いてありました。亡くなってしまった弟は、生きたいという気持ちがあるのに、苦しい思いをしながら亡くなってしまったとこの絵から読み取れました。そして僕にも兄と妹がいるので、兄と妹が死んでしまうと考えるととても耐えられないです。それなのに、それなのに、原子爆弾によって一瞬で、十四万人もの人が亡くなってしまったなんてその一発によってどれだけの人が苦しんで、どれだけの人が悲しい思いをしているのかと考えただけでも心が締め付けられるような感じになり涙が出てきます。それなのに地球平和監視時計がリセットされてしまう恐ろしさも感じました。

被爆された方のお話を聞きました。爆心地から1.8キロメートル離れた場所で被爆され、左手に大火傷を負いその傷を見せてくれました。傷は、広範囲で、遠くから見ても傷跡がわかるくらいでした。見せてくれたのにもかかわらず僕は、つい目をつぶってしまいました。僕だったら、その傷跡を恥ずかしくて見せられないかもしれません。でも、その方は、見せてくださいました。それは、原子爆弾の怖さを教えるためだと思いました。腕だけではなく、指の皮膚もとけてしまい、くっつきそうになっていたのに、布に食用油をしみ込ませて、応急処置をしたそうです。話を聞いていたら、息が苦しくなりました。とてもひどい傷を負った人たちは、他にもたくさんいて、その人たち全員が、想像できないくらい苦しい思いをしています。この方は、大きな傷を負ったにもかかわらず僕たちに戦争のことを伝えようとしてくれる姿に、人間の凄さを感じました。中でも、涙を流しながら語ってくれたのは、妹さんのお話でした。生まれたばかりだったのにお母さんが背中に火傷を負い乳が出なくなってしまったので、亡くなられたそうです。自分が負った傷よりも、家族との辛い思い出の方が、七十九年経った今でも深い傷として残っていると感じました。

一瞬で人の命、家、町、生活全てを失うことになった戦争には、幸せなことは、一つもなかったように見えます。この広島派遣で、僕たちがどれだけ平和に暮らせているのかが、分かりました。あんなにボロボロになった広島街もそれを想像できないくらい綺麗に復興する力が人間にはあります。人間の力を信じて、そして、この今の平和が世界中に広がって欲しいです。僕たちは、今平和な暮らしの中に生きていることを感謝し、戦争がない世界に一步ずつ近づけるようにしていきたいです。

私の曾祖父は、戦争に行き命を落としました。祖父や親戚は、子どもの時に疎開しました。戦時中の話を父母から聞き、私は広島派遣団に参加し、自分の目で戦争や原爆の悲惨さを確かめたいと思いました。

今から79年前の8月6日午前8時15分広島に原爆が落とされました。広島のある相生橋の上空をめがけて落とされました。爆心地は上空600メートルです。

平和記念公園ではガイドさんに案内や解説をしていただきました。原爆ドームは爆心地から160メートルで産業奨励館として栄えていたそうです。平和の鐘は、赤道と日付変更線が交わるところをたたっていることや、平和記念公園の土が敷き詰められているところを掘ると当時の名残があることが分かりました。他にも原爆ドームと平和の灯、原爆死没者慰霊碑、資料館本館は一直線にあることや、水を求めて亡くなった人のために水が周りにあるものが多いことなどたくさん教えてくださり、学びの深い時間となりました。

資料館には、ボロボロになった服や遺品、当時の状況を描いたイラストや写真、B29の模型などが展示されていました。写真を見ると、どれだけひどい状況だったかがよく分かり、ぞっとしました。戦争の流れや復興、伝承についても展示されていました。高校生に語り、絵を描いていくプロジェクトについても記されていました。

被爆体験講話では瀧口秀隆さんにお話をお聞きしました。瀧口さんは4歳の時、爆心地から1.8キロメートル離れた自宅で朝食をとり、外にいたが飛行機の音がしたため家に帰り引き戸を閉めようとしたら被爆されたそうです。瀧口さんは爆風で井戸に飛ばされたそうで、どれだけ強い風かも分かります。腕にやけどを負い指の皮がくっついてしまったそうです。またケロイドもでき、おなかの皮膚から移植しました。私が印象に残ったのは、

「妹が生きていたら…。どうして幼い命が失われ、戦争が行われたのか。戦争や核は絶対にしてはだめ。」

とおっしゃっていたことです。瀧口さんの話から、改めて戦争の悲惨さや、どれだけ辛かったのかを考えることができました。話の最後に、

「平和なき正義はなく正義なき平和はない」

「人間にとって最高の宝は平和」

「みんな違ってみんないい」

という3つの言葉を紹介してくださいました。本当にその通りだと思います。実際に被爆した方からの話を聞けて、とても貴重な経験になりました。

原爆は地上の温度が3000から4000度となり、広島中心部から宮島が見えるくらい焼野原になったといえます。そして、75年間は草木も生えないと言われました。でも、平和を象徴する平和記念都市として建設されることになり、多くの人たちの努力で復興し、今では政令指定都市となっていることはとてもすごいことだと思います。

私は今回の派遣団を通して、戦争を絶対に起こしてはいけない、繰り返してはいけないということを再確認することができました。戦争を経験した方は高齢の方が多く年々減っています。話を聞いた私たちが受け継ぎ、継承していく番だと思います。日本人としてこの出来事を忘れてはいけないし、知らなければならぬと感じました。今回の派遣で学んだことや感じたことを伝えることが被爆体験の継承になるのではないのでしょうか。平和記念公園にある平和の灯は世界中から核兵器がなくなったときに消えます。一刻も早く火が消え、今の日本のような平和な世界になってほしいと願っています。

二度と繰り返さないために

南中学校 3年

私が広島派遣で学んだことは数えきれないほどありますが、何よりも強く感じたのは戦争の恐ろしさです。広島に行く前も戦争が恐ろしいということは聞かされていたし、感じていました。しかし、被爆当時の姿を残す、人類史上初めて投下された原爆の惨禍をありのままに感じさせる原爆ドームや、戦争の様子を生々しく伝える平和記念資料館では、丸焦げになった学生の弁当箱や、戦争中の人々の思いを知って、自分の中で改めて戦争の恐ろしさが確信に変わりました。

私が一番印象に残った体験は、被爆体験者の瀧口さんの話です。その話の内容は言葉に表すことができないほど残酷で衝撃しかありませんでした。授業やテレビ、新聞のニュースを見て知っていた原爆の被爆は、恐ろしい原爆被害の一部で、原爆は熱線、爆風、放射線だけでなく人々の心に深い傷を残すものなのだと知ることができました。瀧口さんは、4歳の時に爆心地から1.8km離れた自宅で玄関の引き戸を閉めようとしたときに被爆したそうです。青い空は黒色に変わり、光と同時にものすごい熱と痛みがはしり気を失ってしまいました。なんとか生き残った瀧口さんとお母さん、そして妹。水を求めて川に行くと、たくさんの方が浮いていて、その人たちは死ぬ前に一口水を飲んで息絶えてしまった人々。なんとむごく残酷なんだろうと思わされました。そして食料もなく、まだ幼すぎる瀧口さんの妹は、なくなってしまいました。瀧口さんと母親は、抱えきれないほどの後悔と申し訳なさ、責任を感じたそうです。改めて戦争は家族をバラバラにすることを実感しました。そして私は、この瀧口さんの泣きながら、思い出したくもないつらい記憶を掘り返してでも私たちに伝えるのはなぜか疑問に思いました。私ならきっと忘れたいから話しません。しかしそれでも戦争の恐ろしさを訴える理由はなんなのでしょう。考えた結果、誰かが伝えないとまた繰り返されてしまうから、その誰かに自分ならうと、平和のためにできることを実行しているのではないかと思いました。今の私たち、未来の人たちが戦争に呼び出されることがないように。自分がつらい思いをしてでも伝えていかないといけないということがよくわかりました。そして感動と勇気をもらいました。私も被爆体験談は話せないけど、平和のために自分にできることをしようと思います。

では、今自分にできることはあるのでしょうか。自分なりに考えた結果、2つ見つけることができました。まず1つ目は、学んだことを周りに伝えていくことです。私も広島に行くまでは戦争の恐ろしさをあまりわかっていませんでした。しかし、やっぱり人の話を直接聞くと恐ろしさの迫力が違いました。被爆体験談のような話にはできないけれど、家族や友人、そしてそのまたつながる人に伝わってほしいです。そして今は、SNSなどを使って、簡単に世界中の人々に誰もが情報を発信できる時代です。自分が興味を持った問題について共有することで、社会の意識の変化を作ることにもつながると思います。2つ目は日常生活の考え方を見直そうと思いました。例えば、学校生活や家の中でも起こるケンカ。何も考えずにただ相手が悪いと決めつけ、反発し続けるのではなく、「なぜ自分は怒っているのか」「相手はなぜ怒っているのか」「原因は何だったのか」「どうしたら解決できるか」このようなことを整理して、冷静に対処することができれば争いは減ると思います。

私は広島で戦争の恐ろしさを知り、それを二度と繰り返さないために、周りの人たちに伝え受け継ぎ、日常のちょっとした心構えを大切にして、今自分にできることを精一杯やります。

私がこの派遣に参加しようと思ったきっかけは二つあります。一つ目は、学校の授業で戦争のことを学んだとき、初めて原爆のことを知ったことがきっかけです。原爆の話を経く聞いたただけにもかかわらず悲惨な出来事であったのだなと小学生ながらに思いました。この悲惨な事実には絶句すると同時にもっと深く知りたいという興味心も湧きました。二つ目は、私の曾祖母が被爆者だったことです。私は学校の授業を受け、原爆について知ったことを母に話したとき、曾祖母が大変な思いをしたことを想像して私は辛くなりました。だからこそ今を生きる私ができることを考えたとき、当時の現状を知ることだと思ったのでこの派遣に参加しようと思いました。そして、実際に原爆ドームを見たときには、一瞬時が止まったかのように固まってしまいました。建物は原型を留めているけれど崩れすぎていて何がそこであったのかは分からないような感じでした。この建物の状態から原爆の威力がどれだけ凄まじいものだったかを物語っていました。私はそのとき、何故こんなにも街を破壊するほどの威力をもったものが作られたのか、何故広島と長崎に落とされることになったのかという疑問が衝撃とともに頭に浮かびました。疑問をもったまま私は平和記念公園を回りました。一緒に回ってくださったガイドさんからたくさんのお話をさせていただきました。その中でも特に印象に残ったことは、何故広島と長崎に原爆が落とされたのかと被爆樹木アオギリについてでした。まず、広島と長崎の二県に原爆が落とされた理由としては、広島には連合国軍捕虜収容所がないとされていたからです。また、長崎については第一目標であった小倉の上空が霧に覆われていたため、兵器工場や造船所が集まっていた長崎に変更されたことが理由だそうです。二つの県の共通点としては、空襲が少なかったため街の状態が良好であったことです。このため、原爆の威力を確認することに適していたことも広島、長崎が原爆投下地として選ばれた理由だそうです。この話を聞き、私は日本が実験台として扱われているように感じ悲しくなりました。そして、この原爆の被害は人だけでなく動植物にも及びました。その中の一つが被爆樹木アオギリです。このアオギリは、爆心地から約1.3kmのところで被爆しました。その後、73年に現在の場所に移植されました。このアオギリは幹の部分が避けて挟れていましたが傷跡を包むように成長しているそうです。当初は、復活の見込みはないと思われていましたが成長を続けたため、その生命力が広島の人々の生きる原動力となったそうです。

次に平和記念資料館を見学しました。中には多くの資料があり、当時の悲惨な様子が描かれた絵や写真を目の当たりにし、想像を超える悲惨さに私は絶句してしまいました。今の広島とは全く違う景色で一つの兵器によってこんなにも人や建物を変えてしまうということも知りました。普通だと思っていた今の景色も当たり前ではないことを再確認できました。

今回の広島派遣を通して私は新しい体験や貴重なお話を聞くことができました。私は実際に広島に行ったことで見ることもできたもの、耳で聞くことができたものを絶対に忘れないようにしようと思いました。そして、私は当事者ではないけれどこんな悲惨なことがあったという事実が忘れられることがないように今回学んだことを後世に伝えていきたいです。

世界の平和に向けて

三好丘中学校 1年

僕が広島派遣団に参加した理由は、実際に広島へ行って、平和の尊さをもう一度考えたいと思ったからです。実際に広島に着いた時は、色んな建造物が建ち、栄えていて、良い街だなと思いました。79年前、この地に原爆が落とされただなんて考えられませんでした。僕は原爆ドーム、平和記念資料館を見学し、そして実際に被爆された方のお話を聞かせてもらいました。

1945年8月6日午前8時15分に広島街に一発の原爆が投下されました。原爆は一瞬で広島街を焼け野原にして、14万人もの命を奪いました。僕が平和記念資料館で目にしたのは、衝撃の写真、絵、遺品の数々でした。眼球が飛び出た人の写真、皮ふが垂れ下がった人の絵、ボロボロになった衣服、原爆の恐ろしさが窺えるものが多く展示されていました。とても悲惨でした。その後は、被爆した方の貴重なお話を聞きました。お話をしてくださった講師の方は、4歳の時、爆心地から1.8Km離れた自宅で朝食後、外にいたら飛行機の音がしたため急いで帰り、玄関の引き戸を閉めようとしたときに被爆されました。講師の方のお話を聞いていく中で、印象に残った言葉があります。それは、「戦争は悲しみ、憎しみ、怒りを生みます。戦争をしても誰も得をしません。戦争は絶対にしてはいけません。核兵器は作ってはならないと、仰っていました。

そして、原爆ドームが平和記念資料館がある平和記念公園には、「平和の灯」があります。「平和の灯」は、原爆投下時に水を求めていた多くの人を慰めるために作られました。その「平和の灯」の前には「原爆死没者慰霊碑」があります。その「原爆死没者慰霊碑」には、ある碑文が刻まれています。「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」と、刻まれています。そして、その「平和の灯」は、全世界から核兵器が一つも無くなるまで燃え続けます。しかし、今、世界では核兵器が何と1万発以上あります。しかも原爆よりも遙かに威力が高く小型になった核兵器が多くあります。そんな核兵器を使ったら、世界は滅んでしまいます。核兵器はとても怖いものです。今、世界各地では皆さんご存じのように戦争が起きています。戦争は関係のない人たちの命を奪います。僕は、被爆された方の思いを語り継いでいかなければならないと思いました。全ては平和な世界にするために。皆さんも平和の尊さについて考えてみてください。

広島派遣を通して、今感じること

三好丘中学校 3年

私は小学校6年生のときに国語の教科書に出ていた戦争の話と、中学3年生の英語の教科書に出ていた戦争の話を読んで、戦争に興味をもちました。また、10年前に広島へ行ったときとは違う感じ方ができると思い、この派遣に参加しました。広島のに着いたとき多くの人の賑わい、駅や建物、樹木もきれいな姿に驚きました。

1日目は、フェリーに乗り、世界遺産である、海上に造営された厳島神社は大きくて、迫力がありました。宮島には歴史を感じられ多くの観光客の人を魅了しているのだと感じました。

2日目には、資料館や原爆ドーム、平和記念公園を訪れ、被爆者体験講話を聴きました。その中でも、印象に残っているのは平和の鐘と原爆供養塔です。

平和の鐘は、よく見ると国境のない世界地図が描かれています。お寺とかで見る鐘といえば、表面上に丸い模様があるものを思い浮かべます。しかし、その模様は宗教に関わりがあるため、この鐘にこめられた、「核兵器と戦争のない平和な世界」というのには逆らっています。実際に鐘を鳴らしたとき、4人で一緒に鳴らしたのですが、それでも重く、勝手な解釈かもしれないけど、それだけ戦争のない世界を望んでいるように感じられました。

原爆供養塔には、戦没者名簿に名前が載っていても、遺族の方が見つからない方の遺骨が入っており、まだ84名の戦没者の方が家族のところに帰れていません。供養塔のある場所は、枯葉、ゴミひとつ落ちていない、特別な場所だと、足を入れたとき感じました。ガイドしてくださった方によると、花が供えられていない日や、枯れた花が供えられていたことはないそうです。このことをきいて、広島に住んでいる人は、忘れられないくらいに平和を願っており、原爆供養塔を守り続ける必要があると思いました。

ほかにも平和な世界がどれだけ大切か、学ぶことができました。家族に会うことができないまま亡くなってしまう人、朝、出かけているときに被爆する人、さまざまだけど、家族と一緒に居られる幸せ、学校に行けば先生や友達がいることは、あたりまえだけどあたりまえじゃないことを改めて感じました。

私たちは実際に被爆したわけではないけど過去にあったことだとしてもこれだけは忘れてはいけないと思いました。広島派遣に行って学んだことを、次の世代に伝えていくことや、知っている人にSNS等で発信していけたら、1人でも多くの人に理解してもらうことができると思うし、生きにくくなっている被爆者の方の力になりたいと思いました。

この活動を通して私は、周りにいる家族、友達との関係を大切にしたいと思いました。普段の生活のなかで、関わり方、接し方に気をつけていきたいです。

広島で感じたこと

三好丘中学校 3年

広島に原爆が落ちてから79年が経った今、町は綺麗に整備され、活気あふれる都市になりました。それに反して、戦争に記憶の語り手は減少しています。

派遣2日目の朝、最初に原爆ドームを見ました。爆心地に近く、風圧のかかり方等、いろいろな要因があり、奇跡的に建物の形が残りました。私はドームの周りを見てみました。

周りはビルが並び、当時、レンガが崩れ、鉄骨が見えるようになったそのままの様子だったドームだけが振立した雰囲気でした。近くには元安川があり、ドーム付近で被爆した人達は水を求めて苦しんでいたことが強く感じられました。

次に、平和記念公園、資料館に行きました。公園には平和の鐘がありました。鐘には国境のない世界地図が描かれており、国同士、戦争をせず、平和な世界を実現しよう、という思いが込められています。そして、原爆の子の像で2人の団員が千羽鶴を捧げました。多くの鶴が捧げられており、多くの人が平和を望んでいるから、戦争を起こしてはいけない、ということを変えて思いました。

資料館に着き、まず目に入ったのは平和監視時計でした。原爆投下からの日数、最後の核使用からの日数が示されていました。私が見たとき、最後の核使用から79日経っている、ということが示されていました。

展示階に上がると被爆当初の様子、火傷で苦しむ人、ぼろぼろになりながら移動する人達、被爆した方の当時の状況や遺品が写真や絵、現場で展示されていました。また、被爆体験講話で、瀧口さんに語っていただきました。原爆は火傷が酷い、ということは知っていました。しかし、勢いの強い爆風は爆心地周辺で約3000℃。少しは下がったとしても、かなり高い。そんなものを浴びては経験していない私達には想像できないものだろう、と思いました。また、瀧口さん自身も4歳の時に被爆し、今では目立ちにくくなっていますが、治療する時は、薬もまともに使えない環境でとても苦しみながら行ったそうです。

資料館での経験から、原爆の犠牲者は約14万人にのぼるが、一人ひとりに家族がいたり、友人がいたり、暮らしていただけなのに一瞬で失ってしまったり、傷を負うことが「悲惨」と言われる要因の1つなのかな、と感じました。

この派遣で戦争、原爆の被害、悲惨と言われる要因を学ぶことができました。これからは、後世に伝えていく側の人間として過ごしていきたいです。また、教科書やネットからでは感じられることは限られると思います。実際に足を運び、自分の目で見てほしいです。

広島派遣を通して学んだこと

三好丘中学校 3年

私は広島派遣団に参加して、戦争や原爆について知ることができました。

平和記念資料館で心に残っていることは、二つあります。

一つ目は、プロジェクトマッピングを使い原爆が落ちる前の広島。原爆が落ちた直後の広島。そして現在の広島からの様子を見たことです。一瞬で変わっていく広島を目で感じることができました。また、原爆の落ちた直後の広島は緑がなかった。現在の広島は緑豊かで広島復興も感じることができました。

二つ目は、企画展の「ともだちの記憶」です。自分と同じくらいの歳の子どもたちの遺品や絵が展示されていました。子どもたちの生死の分けた状況や、生き残った苦しみ知ることができました。生き残った子どもたちは死んだ友達に対する後ろめたさのようなものがあつたと感じました。

被爆体験講話では、三つのことを学びました。

一つ目は、原爆の恐しさです。1. 8キロメートル離れているところでもやけどしたり、飛ばされたりするなど威力が凄まじいと知りました。原爆関連の死者は約十四万人もいると知りました。

二つ目は、被爆後の生活の辛さです。被爆後の生活について聞くのは初めてでした。熱線で皮ふが溶け、指と指の間がつながってしまっていたという話がとても印象的でした。被爆直後だけでなく年月を経て、白血病などにかかり亡くなっていく人もいたこと知りました。

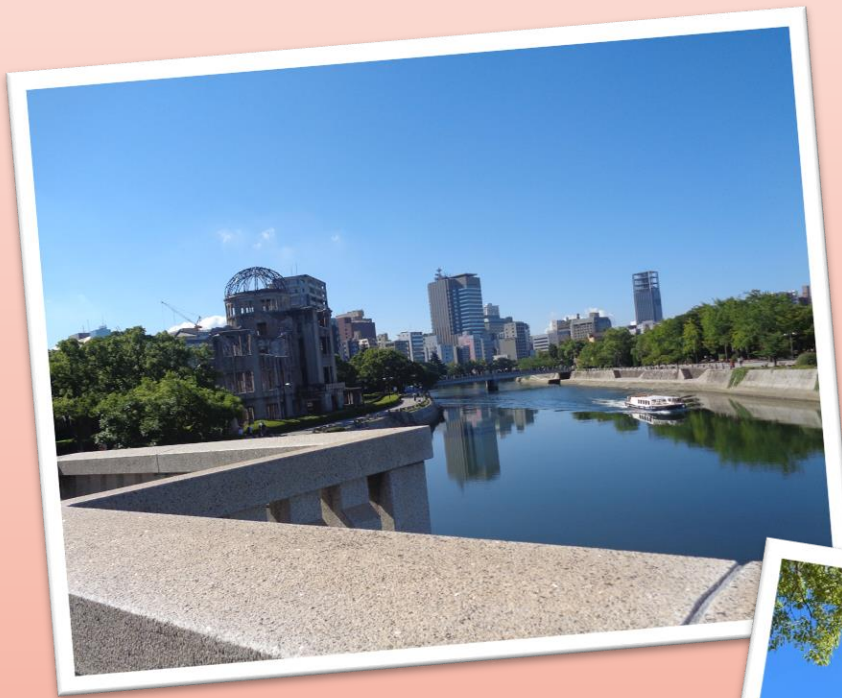
三つ目は、被爆者の思いです。講話の中で泣きながら声を大きくして訴えていることがありました。

「戦争は絶対にしてはいけない。核兵器は使ってはいけない」科学の発展は人々の生活をよりよくしていくものに使ってほしい。戦争の大変さ、核の悲惨さを伝えてほしい。」

思い出したくないであろう当時の体験を伝えてくれました。思い出したくなくても、伝えたい、伝えてほしい。強い思いを感じました。

この派遣を通して、戦争や原爆について知ることができました。原爆は恐しい。そんな一言で表せられるものではありませんでした。思っていたよりも遥かに恐ろしいものでした。世界から原爆をなくしていく必要があると感じました。戦争はしてはいけなはずっと思っていました。しかし、戦争について知らないことばかりでした。みんなに戦争について知ってほしいです。そのために私は何ができるのかと考えてみようと思いました。

自分のできることは、派遣を通して学んだこと、知ったこと、感じていくことだと考えました。私が伝えていくだけでは何も変わらないと思う人もいるでしょう。でも、私が伝えていくことで一人でも多くの人が興味をもってくれたらいいと思います。そして、体験講話を直接聞くことが今後できなくなります。それでも戦争をしていかないようにするには当時の出来事を受け継いでいく必要があります。私は語り継いでいく一員になりたいです。戦争や原爆の知識をもっとつけたいです。自分のできることをこれからも探し続けていき、できることは、どんどん取り組んでいきたいと思っています。



令和6（2024）年度みよし市中学生平和学習広島派遣団